



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

INAXライブミュージアム10周年特別展

## つくるガウディ 進行中!

vol. **42** | 季刊 **冬**  
2017



INAXライブミュージアム10周年特別展

# つくるガウディ 進行中!

INAXライブミュージアム10周年特別展「つくるガウディ」がいよいよ始まりました。

第1会場の土・どろんこ館の展示室は、まるで建設中の工事現場。ヘルメット着用で入場する来場者たちが興味津々、左官やタイル職人の仕事場・手仕事を間近で見ている。刻々と変わっていく「ものづくりの現場」のレポート。そして、特別展の総合アドバイザーである田中裕也さんへのインタビューです。

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

## CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol.42 | 季刊 冬  
2017

表紙写真

大阪から来た子どもたち。特別展「つくるガウディ」第2会場、壁一面の手描きの実測図に見入っています。「ガウディって知ってる?」「知らない」「変わった形!」。いつかスペインにガウディ建築を見に行けるといいね。

(2016.11.20)

撮影:加藤弘一

### 01 [特集]

INAXライブミュージアム10周年特別展

## つくるガウディ 進行中!

### 02

第1会場「つくるガウディー塗る、張る、飾る!」ドキュメント

### 05

特別展総合アドバイザー・第2会場で実測図を展示

実測家 田中裕也、ガウディを語る

### LIVE REPORT

開催報告

### 06

INAXライブミュージアム10周年

特別展「つくるガウディ」

特別講演会「田中裕也ーガウディを測りつづける男」

### 07

タイルのおうちをつくらう

陶と灯の日

旅するパーラー陶の森

### 08

光るどろだんご全国大会2016

フィンランドからサンタクロースがやってくる!

### LIVE SCHEDULE

これからの催し

### 09

お知らせ

窯のある広場・資料館の一時閉館

特別展「つくるガウディ」関連ワークショップ

ぼくとわたしのガウディ

特別展「つくるガウディ」関連講演会

「GROUNDSCAPE」上映 常滑編



左上:一木橋 / 左下:一木橋からの現在の様子 / 右:一木橋の上から見た様子(昭和30年頃)(「常滑とこしるべ」より掲載)

### 常滑から※

41

## 60年前の常滑の街

常滑には丘陵地が多く、切り開いて道を通したような地形がたくさんあります。

また、ここには陸橋のように橋が架けられ、丘の上の道と切り開かれた下の道が交差する立体的なところがあります。その代表として大正10年に架けられた一木橋があります。レトロなデザインの時代を感じさせる印象的な橋です。

かつては、一木橋がまたぐ道の両側には、多くの製陶所が建ち並び、数十本の煙突が毎日石炭の煙を立ち上げていたと聞きます。製陶所で生産されたやきものを古くは馬車、昭和にはオート三輪が日々運搬していた様子を写した古い写真があります。この写真は、昭和30年(1955)頃の一木橋の上から南方向に撮影されたものです。現在、同じ場所からの写真と比較してみると60年の時間で、変貌した常滑の街の様子がわかります。

小関雅裕(ものづくり工房)

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できことなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



土などの材料をすべて用意して来た久住さんは、現場を見ると、予定していた外壁の色を変更。急ぎよ、トラックで土を買いに走った。「土・どろんこ館の版築の壁のような色を考えていたけれど、日本らしさを出しながらタイルを活かす、ちょっとくすんだ白色にしようかなと。その時、いちばん良いと思った仕事をしたいじゃないですか。ライブミュージアムは自由な場所やから」と、久住さん。



イメージが決まり、準備ができれば一気に塗る。「このくらいのもなら、特に指示はしない。みんな技術を持っているからね」。親方である久住さんのもと、職人たちの動きは無駄がない。

### タイル

「左官は自分で塗りながら建物の表情を変える。職人としては理想だね。そういうタイルを作ってみたかった」と、白石さん。その言葉の意味は、白石さんの作業が進むにつれてわかってくる。



つくるガウディ 塗る、張る、飾る!

## 制作開始

11月1日→



基礎構造体の周りに丸太で足場を組み、軽量モルタルで下塗りが終了。いよいよ、左官職人の久住有生さん、タイル職人の白石普さんが登場しました。



### テストピース

外壁は愛知県の豊田と兵庫県淡路の土。中の壁は、浅黄色・小豆色など、日本の土が持つ色を塔ごとに塗り分ける予定。仕上げについても、さまざまな構想を持っている様子だ。



【第1会場】

つくるガウディ 塗る、張る、飾る!

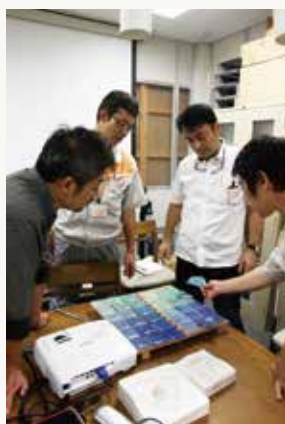
## 準備・搬入



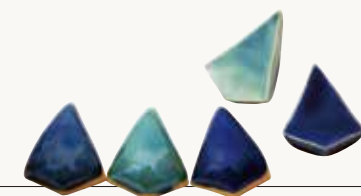
会場の4分の1のスケールで見ても、コローニア・グエルは大きい教会ではない。しかし高さは会場の天井いっぱい、つまり実際には16mで、現在の建物では4階建以上になる。さらに、ガウディは34mの高さの塔をつくるつもりだった。ミュージアムの隣の資料館の煙突が22m。それ以上の高さを煉瓦で積んでいくというのだ。「ガウディの求めるものは、スケールアウトしている。それも、今回の制作でわかったことの一つ」と、日置さんは言う。

### タイルの制作

タイル職人の白石普さんが張るタイルはすべて、今回のために作られたオリジナル。白石さんがご自分の工房で作った試作品をもとに、ものづくり工房で量産



最初に作ったタイルは2つの形。コバルトと酸化銅の配合の違いで、7つのカラーバリエーションを作る。さらに釉薬を表と裏に付け分けることで、2倍のタイルの種類ができた。



造形的にも美しい鉄筋の基礎。一つひとつ違うアーチの形は、構造実験で紐を垂らした時にできる曲線。この形が建物を支える。



立体的なタイルは多様に展開するだろう。さらにタイルは、一つひとつ表情が違う。「気持ちよく色のばらつきが出るように工夫しています。釉薬のムラは日本の感じがすごく出ている。『ゆらぎ』みたいなものもねらいの一つかなと。これはもうタイルというより、やきもの、陶芸品です」。

モロッコで隙間を埋めるために多く使われる「ルーザ(=木の実)」という幾何学模様を、白石さんは丸く立体化した。「最初に形を見つけた時にはあまりイメージできなかったんですが、自分たちで数枚作って並べてみると、白石さんの考えていることが少し理解できるようになりました」とスタッフ。

しています。量産といっても、型の作成・成型から釉薬をつけるところまで、すべて手作業。「僕らの作ったタイルがどう活かされるか、ワクワクしています」と、スタッフ。タイルの制作も同時進行中です。





一枚一枚、ていねいに、白石さんがタイルを張っていく。命を吹き込むと言ったら大袈裟だろうか。でも、張られたタイルたちが雄弁に語り始めるのは確かなことだ。

「今回のタイルは、裏を丸くしたことによって、いろいろな張り方ができます。平らにしたり、尖った感じにしたり、動きが出せる。左官が土の表情を変えるように、タイルでも表情が変えられる。さまざまな立体感も出せる。それはこのタイルならではの。張っていると、もっとこのタイルの可能性を考えることができる」と、白石さん。



タイルの色は、ブルーからグリーンのグラデーション。「やきもので一番きれいな色」だと言う。



左官の学校に通いながら工務店で働いているという、左官見習いの女性(25歳)がやってきた。「ガウディと聞いて来たら、久住さんがいた」と喜ぶ。「現場がすごくきれい。いい仕事をするためにはこういうことが必要なんですね。それに、仕上げがものすごくやわらかい」。久住さんから「家でパネルを作って練習することもできるよ」とアドバイス。



# 特別展「つくるガウディ」総合アドバイザー・第2会場で実測図を展示 実測家・田中裕也、ガウディを語る

特別展「つくるガウディ」総合アドバイザー・第2会場で実測図を展示

## ガウディ・ショック

初めてサグラダ・ファミリアを見た時、感動というより、打ちのめされた。カルチャーショックでした。もう建築やめようと思ったほど。でも、その後何年たっても、ガウディが頭から抜けない。ならば、この最大級におかしな建築を追求してみようと、スペインに渡りました。

## 階段から始まった実測

現地に行ったものの言葉もわからず。しばらくはグエル公園に毎日通って、階段に座って悩んでいました。まあしょうがない、測ることくらいならできるかなと、測り始めたのが、その階段。実測してスケッチして、何度も描いているうちに絵が大嫌いだっただのが、その気になってきた。嫌いなことを変えてしまおう。白い面白さがありました。その後、カサ・パトリヨ、カサ・ミラ、そしてサグラダ・ファミリアと実測を続けました。いつも階段から。この階段、次の階段と測っているうちに、動線や間取りが見えてきて、内部空間が立ち上がっていく。それをアイソメ図や立面図にする。階段をたどっていけば全体の空間が把握できる。偶然にして、そのやり方が正解だったので。

## 実測・作図から見えてきたもの

ガウディは、内部の生活空間に細やかな工夫をしている。それも実測と作図から見えてきたことです。たとえばカサ・ミラ。どの面もすべて曲線。測るには常識を越えた建物です。そこでファサードの曲線と影のかたちを同じ時間帯でスケッチすることで建物の様子をつかみ、そこから目地と窓の関係を把握することにしました。目地をたどって影のかけ具合を観察して立面図にすれば、外壁や柱の形

状が見えてくる。へこんでいればより影が落ちますね。実際部屋に入ると、窓が大きいからすごく明るい。だけど影が落ちているから、やわらかい光になっている。スペインの日射は強い。ガウディは日焼けを避けるため、明るさを確保しながら焼けない仕組みを考えた。壁面の、はね出しの部分、互い違いになっているでしょう。部屋によって影の落ち方を変えるためです。そうやって内部空間を心地よくしたのです。

## 装飾の真の意味とは

田中裕也 たなか ひろや  
実測家・建築学博士

1952年北海道生まれ。3年間の建築事務所勤務の後1978年バルセロナに渡り、ガウディ建築の実測を開始。現在に至るまで主要な建築物の実測図を描き続ける。実測図面は展示や著書などで公開され、その功績はスペインで高く評価されている。著書に『実測図で読むガウディの建築』(彰国社、2013)ほか。

## まだ見ぬガウディ・コードを追って

ガウディは天才でしょうか。僕はそうは思わない。一人の人間として、ガウディも格闘し成長しながら作品をつくりあげた。そこにはガウディと仕事をすることを生き甲斐とする多くの職人がいた。建築は決して一人でできるものではないのですから。ガウディが建築に込めたガウディ・コード。まだまだ新しいものをみつけますよ。僕にとってガウディは、いつも傍らにいる無二の親友みたいな存在かもしれません。

